

兵庫県生物学会 第46回大会報告

日時：平成4年5月23日（土）

場所：兵庫女子短期大学

日程：

総会 司会 山田 隆

- (1) 開会のことば 東播支部長 阿蘇 達郎
- (2) 会長あいさつ 富川 哲夫
- (3) 来賓祝辞 兵庫女子短期大学 教授 水野 俊一
- (4) 兵庫県生物学会奨励賞授与
 - 小林 禧樹 西神戸の植物について
 - 後藤 統一 甲子園浜の総合調査について
 - 工 義尚 野鳥の生態について
- (5) 感謝状贈呈
 - 前田 常雄氏
 - 浜田 士郎氏

議事 議長 新穂 高史・真野 育三

- (1) 平成3年度会務報告
 - ① 第1回理事会 4.20 兵庫県学校厚生会館
 - ② 会計監査 5.17 神戸野田高校
本部役員会
 - ③ 第45回大会 5.25 但馬地域地場産業振興センター
 - ④ 夏期研修会 8.1～2 小城原生林
8.1～3 神戸大学付属臨海実験所
 - ⑤ 本部役員会 8.30 兵庫県学校厚生会館
 - ⑥ 第18回公開講座 11.16 兵庫県学校厚生会館
「川底にすむ昆虫の生活」
—とくにヒゲナガカワトビケラを中心に—
理学博士 西村 登氏
 - ⑦ 第2回理事会 12.14 新長田勤労市民センター
 - ⑧ 東播磨支部理事会 3.12 加古川市
 - ⑨ 平成4年度理事会 4.18 新長田勤労市民センター
 - ⑩ 会計監査 4.25 県立明石高校
- (2) 平成3年度会計決算報告・監査報告
- (3) 平成4年度企画案審議
- (4) 平成4年度予算案審議
- (5) 第47回大会（但有支部予定）

会員研究発表

- 工 義尚氏 「ため池地域のサギ類群集の動態」
竹下 信氏 「コカナダモの衰退とオオカナダモの
優占が進む武庫川・猪名川水系」

記念講演

「エイズ(AIDS)—現況と教育の必要性」

兵庫女子短期大学教授 医学博士 竹原 学先生

【会員研究発表 1】

「ため池地域のサギ類群集の動態」

工 義尚（県立播磨南高等学校）

江崎保男（県立人と自然の博物館）

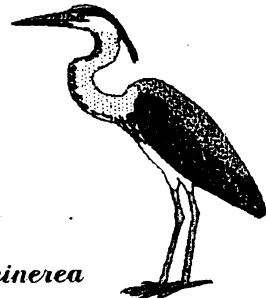
<要旨>

播磨地方の水田・ため池地域では夏鳥2種を含む6種のサギがごく普通に見られる。18のため池を含む約5km²の調査地を設定し1990年10月から1991年9月まで、各種の個体数と場所利用の様式を調査した。夏鳥が冬から初春に見られないのはもちろんのこと、留鳥性の種でも個体数は冬から初春に少なく、夏から秋に多いパターンを示した。

個体数の日周変動と昼間の採餌個体の割合からはダイサギ・チュウサギ・コサギ・アマサギが完全な昼行性であるのに対し、アオサギとゴイサギは夜間にも採餌することが示唆された。

主要な採餌ハビタートは種間で異なっていたが、これらは必ずしも固定されたものではなく、特にコサギの主要なハビタートは秋冬期における池の開水面から夏には耕作地へと移行した。魚食性の種では個体の分布に強い分散の傾向が認められたが、10月から11月にかけて池の水が抜かれるとその池に多数のサギが集合した。このようなサギ類群集のダイナミックな様相は各種にとって好適な餌場の分布が季節的に変化する結果として説明できるが、このことには耕作等の人の活動が大きく影響していると考えられた。

種間の攻撃行動は魚食の種同士で稀に見られたが、その内容はアオサギの夜行性の傾向に関連して興味ある問題を投げかける。



Ardea cinerea

〔会員研究発表 2〕

「コカナダモの衰退とオオカナダモの優占が
進む武庫川・猪名川水系」

竹下 信・円増 肇

Dominance of *Egeria densa* and Decline
of *Elodea nuttallii* in Muko and Ina
River Systems

〈要旨〉

1990年に竹下と岡は、北摂・丹波地域河川におけるカナダモ類（オオカナダモ・コカナダモ）の現況について発表し、それらが今この地域河川で他の沈水性水草を制圧していることを明らかにした。この報告は、それに続いてその両域中の武庫川と猪名川の水系において、オオカナダモとコカナダモがどのように競争して、前者が後者を制しつつあるかを示したものである。同時に、この両水系から独立した小河川の夙川においては、オオカナダモの侵入がなく、依然としてコカナダモが優占していることも傍証としてあげている。

毎年夏になると琵琶湖ではカナダモ類が大発生し、生態系に大きな影響を与えている。しかし、オオカナダモ・コカナダモのいずれが優勢であるかは明らかでない。それは両水草の琵琶湖に対する適応性がほぼ同じで、一進一退の闘争が続いているからである。これは琵琶湖特有のもので、他の湖沼や河川は、それぞれの環境要因にもとづいて独自の変化を遂げている。

竹下らはほぼ20年間、山並一つをへだてたこの両水系の水草分布状況を観察してきた。

その間、大水や改修工事のため、両水系の河川相はいずれも変化したが、いわゆるフラッシュ現象により水草が一扫されるということはなく、沈水性水草フロアは確実に表題のように変化しつつある。

- 両水系の水草と水草群落の現況
- 両水系でのオオカナダモとコカナダモの変遷
- 調査結果

オオカナダモが優占する河川と河川の部分
オオカナダモが侵入し、占有地を広げつつある河川
コカナダモが優占する河川

○考 察

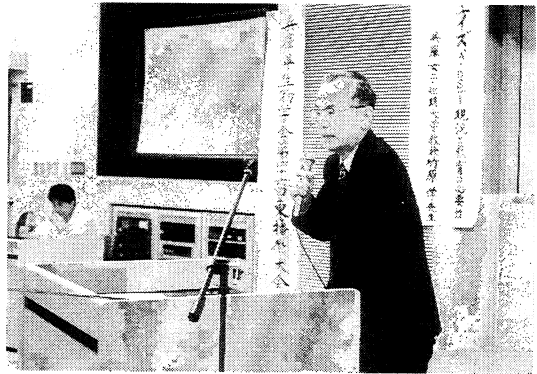
両水域でオオカナダモの優占が進む原因

1. 河川上流の占拠
2. オオカナダモの他種群落への割り込み
3. コカナダモに優るBOD物質への適応性

〔記念講演〕

「エイズ（AIDS）現況と教育の必要性」

兵庫女子短期大学教授 竹原 学先生



〈要旨〉

今やエイズは地球上の全人類にとって最大の脅威であると共に、我々日本人にとっても対岸の火災どころか、身近に迫ってきた重大事として受けとめねばならない。

エイズはアメリカ、アフリカ、ヨーロッパの順に患者・感染者数が多いが、最近東南アジアにも急速に拡がりつつあり、警戒が必要である。日本では患者・感染者ともにまだ少なく、その感染経路もこれまでは血液製剤によるものが中心だったが、今後アフリカ型一すなわち異性間性交渉による感染が増加するものと予測される。

エイズはレトロウィルス的一种であるHIVによって引き起こされる重篤な免疫不全症である。このウィルスの遺伝子は逆転写酵素によって宿主の遺伝子の一部に組み込まれるので、抗体ができてウィルスを全滅するには至らない。HIVはT₄リンパ球やT₈リンパ球を破壊しながら増殖し、いろいろな病気一日和見感染や癌の一種などを発病させる。発病に至るまでの時間は長い、有効な治療法が確立されておらず、一旦発病すれば致命的である。

感染初期は無症状であるので、気づかずに他者に感染させる危険性が高いことが、この病気の予防を困難なものにしている。だが、HIVの感染経路は明確であり、感染力も低いので、正常な家庭生活の中での感染はまず考えられない。リスク群への適切な対策と、エイズの基礎知識の普及によって、流行を抑えることができるであろう。

大会出席者名簿（五十音順）

阿蘇 達郎（播磨南高） 荒柴 博一（姫路南高）
伊賀崎香木（賢明女子学院高） 一色 八郎
上岡 雅和（明石高） 上中 一雄（県教育委員会）
上根 大輔（東播磨高） 宇那木 隆（賢明女子学院高）
馬澄 俊誠（龍野高） 岡村 はた（聖和大学）

甘中 照雄 (山崎高)	北村 健 (小野高)
小林 利雄 (加古川西高)	小林 禮樹 (県立公害研究所)
近藤昭一郎 (夙川学院高)	後藤 統一 (西宮甲山高)
阪口 正樹 (西宮東高)	清水美重子
新穂 高史 (加古川東高)	鈴木 讓 (兵庫高)
高岡得太郎	高橋 匡
工 義尚 (播磨南高)	竹下 信 (市立伊丹高)
谷口 博	田村 統 (山崎高)
辻本 達茂 (尼崎北高)	当津 隆 (姫路学院)
富川 哲夫 (夙川学院)	中西 敏昭 (兵庫高)
中村 義孝 (明石西高)	橋本 一夫
橋本 光政 (県立人と自然の博物館)	
濱上 香子 (加古川西高)	浜田 史郎
平畑 政幸 (姫路学院女子短大)	藤田 和夫
藤本 英行 (神戸高)	藤本 義昭
古田 昌 (香寺高)	堀 治三郎
前田 常雄 (村岡高)	榎谷 佳子 (県商)
松本 恵子 (農業高)	真野 育三 (小野高)
三木 正士	水野 俊一 (兵庫女子短大)
向山 俊作	室井 緯 (姫路学院女子短大)
守田 治夫 (姫路東高)	安本 直 (神戸高)
矢頭 卓児 (加古川西高)	山下 明良 (播磨南高)
山下 智子 (龍野高)	山田 隆 (長田高)
山根 秀治 (伊丹西高)	横山 了爾 (家島高)
吉田 孝 (淳心学院)	渡辺 猛 (龍野高)

平成4年度 夏期研修会報告

笠形山 (多可郡八千代町) 観察会 (8月6, 7日)

7日の朝9時, 小林拓郎先生 (西脇市動植物生態調査研究グループ代表) の案内のもと, 瀬加の寺側から登り始める。いまにも雨が降りそうな空であった。植物の観察, 採集をされる方はさっそく, ビニール袋に植物を入れている。曇っているせいで昆虫類はあまり目につかない。最初の休憩時に藤本先生と谷口先生が, すぐさま新聞紙に植物を挟んでいく。電気乾燥機にかけると, 一日できれいな植物標本ができるとのことだ。1時間ほど歩くと, 笠形神社に到着。周りはスギ, アカガシの見事な大木が茂っている。なかでも「笠形の大スギ」の立派さに圧倒された。この神社内のヒノキが昭和34年姫路城の心柱に使われたと石碑に刻まれていた。スギ林をぬけてヒノキの植林されたばかりの草原を登っていく。ここでヘリグロリンゴカミキリを採集。小野高校の北村先生がジャノメチョウを採集するが, 曇っているのではほとんど飛ばない。

次にヒノキの植林された林に入り, 雲の中を歩いて笠の丸という休憩所に着く。ここで小休止。あと30分で頂上ということのでいままて採集した植物は, いったんこの

場所に置いていくことにする。ここから頂上までの道は, 両側よりチュウゴクザサがびっしり覆いかぶさっていた。登り辛かったが, 参加者中最年少の小学1年の女の子も頑張って, 12時過ぎに全員頂上に着く。食事が終わる頃には, 雲が切れてきて, クロヒカゲ, ツマグロヒョウモン, ジャノメチョウなどが飛び始める。ヒメヒゲナガカミキリやアカハナカミキリも見られた。下山時には視界もひらけ, 遠く家島, 淡路島も見ることができ, 気分良く下山。天候の回復によって, 昆虫を採集しながら下山したので, 植物採集の方を30分以上も待たせることになってしまった。しかし, モミの倒木で成虫になったばかりと思われるオオヨツスジハナカミキリを, 北村, 真野で10匹近く採集できたのは収穫だった。 (真野)

参加者 (五十音順)

阿蘇 達郎 (播磨南高)	稲葉 浩介 (宝塚西高)
北村 健 (小野高)	小林 拓郎
阪口 正樹 (西宮東高)	谷口 博
富川 哲夫 (夙川学院)	西村 義孝 (明石西高)
平畑 政幸 (姫路学院女子短大)	
藤本 義昭	真野 育三 (小野高)
三木 正士	山田 隆 (長田高)

第10回臨海実習の報告

神大(理)附属臨海実験所 (淡路島) で, 榎本幸人教授の指導により8月11日~13日に臨海実習を行った。

今回は, 大阪府の高校の先生11人と兵庫の6人, 計17人で行った。11日, 私の担当でウニの採集と発生実習を行った。材料は, 実験所近辺でムラサキウニが採れないので, 上島 (かみしま) へ船で1時間。上島の沖で水中照度の測定。授精率85.7%, 墨汁海水で動物極 (いわゆる卵門) を観察, ステージごとの標本をビンに入れて教材に。

12日, アナアオサの接合実験を予定していたが, 成熟個体が見つからない。岩屋では満月の1~2日前に成熟し, この日はちょうど良い日のはずが, 急拠予定を変えて, 海藻の採集と標本の作成を実施。13日, 午前11時, アナアオサの成熟個体が見つかった。接合実験に入る。配偶子(n)は青色光に正の走光性を示すが, 接合子(2n)になったとたん負の走光性を示すことが, 赤外線カメラで明瞭に確認できた。12日, 13日と講義で何度も聞かされていたことを, 一目で全員納得。実験終了4時。材料調整の難しさを実感。全館大掃除の後, 5時解散。充実した3日間でした。 (阪口)

参加者

中田 浩嗣 (県立淡路高)	清水 洋 (市立尼崎高)
稲葉 浩介 (宝塚西高)	北方 英二 (芦屋南高)
尾松 浩明 (阪神養護)	阪口 正樹 (西宮東高)